法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-09-01

〈中本正智博士 著書紹介〉『琉球語彙史の研究』

名嘉真, 三成

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
琉球の方言
(巻 / Volume)
18-19
(開始ページ / Start Page)
86
(終了ページ / End Page)
87
(発行年 / Year)
1995-02-24

Hosei University Repository

『琉球語彙史の研究』

名嘉真　三　成

本著は1983年４月に三一書房から出版された。「第36回毎日出版文化賞」に輝いた『図説琉球語辞典』に続く第８番目のものである。従って、内容的に語彙論に関する著書が連続して出版されたことになる。本著の「あとがき」にもあるように、前者が辞典の体裁からくる制約もあって十分な記述ができなかった部分を、後者は語彙の体系的な張り合い関係の中で記述することによって、語彙の歴史を捉える点に特色がある。即ち、語彙をなるべく多くの側面から総合的に把握し論述することにより、語彙史を体系的に明らかにするのが本著の目的と言える。一語につき約150地点もの言語地図を描き、さらに『おもろさうし』などの文献も参考にしつつ比較言語学的方法によって語彙史を論究するゆえ、ダイナミックかつ精緻さにあふれる内容である。

目次は大きく、「総説－琉球語の成立と発達－」、「身体・心」、「人間関係」、「代名詞」、「地名・方位・時」、「生物」となっており、言語生活に密着した基礎語彙を中心に据えている。まず、初めに琉球語の研究が日本語史に及ぼす影響や琉球語が日本祖語から分岐後どのように変化し、また時代ごとにどのような語が借用されたかなどについて論述する。そして、次に各分野別に語彙の実態や歴史を明らかにする。琉球語の研究が日本祖語を再構するのに重要な役割を演ずること。琉球語彙史が（１）史前琉球語の時代、（２）原琉球語の時代、（３）集落語の時代、（４）地方語の時代、（５）首里王朝語の時代、（６）九州語受容の時代、（７）共通語受容の時代の７つに区分できること。などを提示したことは、琉球語彙史は勿論沖縄の言語生活史にも極めて示唆的である。

さて、「身体・心」の項では頭部や胴体部、足部などの語彙の意味や形態について論じる。いずれの語でも豊富な資料を駆使した実証的論述である。その中で「語の分布型」として、（Ⅰ）南北琉球にまたがる分布、（Ⅱ）北琉球内の分布、（Ⅲ）南琉球内の分布という姿を明らかにした点は重要である。語の新古の層や伝播の仕方を、初めて具体的に把握できたからである。また意味の面の研究で、tʃimu （肝）に関して肉屋で「豚の心を下さい」と誤用する例などは、琉球語圏の国語教育に関しても無視できないものであろう。

「人間関係」の項は、「人」「男女」「父母」「祖父母」などの語彙について論述する。随所におもろ語との比較研究も行われ、語史の実態を緻密に捉えている。中でもドゥシ（友人）を綿密な音韻論から、従来言われていた「同忘」でなく、「ど甲ち」に対応すると考えたのは卓見である。ただ、音韻変化の面で、宮古の*kora（子等）→fura→ffa との変化は甲類の

Hosei University Repository

コであるから*kora→kura →fura→ffa と改める必要があろう。

「代名詞」の項では、初めて首里方言の成立を具体的に明確化した点が特筆される。即ち、首里方言は沖縄中南部方言を母体に、周辺言語をかかえ込みながら本土方言の影響も受けつつ成立したとのことである。各時代の社会状勢や首里方言の特色などを考慮にした総合的な見解だけに、注目に値する。勿論、「人称代名詞」や「指示代名詞」の祖形の再構に関しても、注目すべきことが多い。例えば、琉球語の指示代名詞に「こ系列」や「あ系列」はあっても、「そ系列」の語が存在しないのは何故だろうか、今後検討すべき問題である。なお、八重山の人称代名詞に関連して、vva（君）→uva→uwa→wa: の変化は、vva→va: →wa: と考えた方が良いと思う。

次の「地名・方位・時」の項は、沖縄の特徴的な地名などについて、従来の学説を紹介しながら論述したもので、大変おもしろく参考になる。津堅島は「連れ島」、久高島は「浦葵島」。そして仲村渠は「アカリ」（離り）と関係のある地名という。また方位を示すアガリ（東）はこれまで「上がり」に対応すると考えられていたが、*agarupe（上がる方）に遡るようである。因に、名前の「比嘉」は「ヒガシ」（東）のシが脱落したのではなく、「ヒムカ」（日向）からの変化という。

最後の「生物」の項は、「牛」「馬」「雄」「雌」などに関する論考である。宮古の nu: ma（馬）が「乗り馬」を語源とすること、「ゑけり」「をなり」の語は北琉球に存在し、「をなり神」信仰と関係すること、などを明らかにした。生物語彙に関しては勿論、民俗学的にも大変興味深い内容である。

いずれにしても、本格的な語彙研究の少ない中で、本著は優れて語彙自体とその背後の世界を如実に描き出してくれる。いわば、沖縄の言語と文化を隈なく照らす必読の書である。

（琉球大学教授）